

卷之七
旧高瀬通たかせどぬしに沿って



高瀬通跡の「はげの木」の紅葉……この木は玉島職業安定所の北方200mほどの所にある。この木より以北の旧土手には新住宅が近年にわかに建ち並んだ

卷之七 もくじ

一 天上大風の碑と良寛 …………… 3
 建立由来記 逸話 晩年の良寛さん
 二 高瀬通跡と櫛はの水 …………… 5
 高瀬通跡 櫛はの水
 (資料) 高瀬通今昔 旧高瀬通経路図
 三 舟だまり跡 …………… 9
 高瀬通しの終点玉島舟だまり跡
 高瀬舟の図
 四 万葉の歌碑 …………… 11
 万葉の歌へ物に属けて思ひを發す歌一首
 (并せて短歌) 万葉の歌碑由来記
 (資料) 歌碑の歌の背景
 五 水谷勝隆の胸像 …………… 14
 建立由来碑文(水谷侯について)
 水谷三代系図 水谷侯三代玉島開発
 略記と関連地図 水谷侯遺徳顕彰
 之碑と建立由来碑文
 水谷三代家断絶の謎

六 水道紀功碑

碑文水道紀功
 玉島の上水道
 碑文解説

19



良寛と童(玉島公民館ニ階ロビー)
 新倉敷駅前ロイズ像の原型

原型 平田郷陽
 重要無形文化財人形作家
 制作 宮本 隆

〔壹〕 天上大風の碑と良寛

碑は倉敷青年の家前庭にあり

建立由来記 —「写真左下の碑文」

嘉永六年越後燕町の一小童が持参せし一紙に
托鉢途上の良寛上人が書して与えしもの

この四字字まことに真率にして無我 往昔



良寛と小童の間に交されし笑談を想起するに足
る 天上大風の中に限りなき大志を抱き天空
に舞い上る爽快の気風充溢す 以て青年の家
庭前の碑文字とするにふさわし

昭和四十六年十一月 玉島青年会議所



良寛の墨蹟

Ⅱ 逸話 Ⅱ

良寛の人間像はその作品——詩・歌・
書を通して味わうことができる。と云わ
れる。とりわけ書は芸術的にも秀れ
ているといわれ、王羲之や小野道風の
書を手本に自分自身の書を深く追求し
たといわれる。

その故に、自由無礙活潑な書風を求

める人々が多かったが、良寛は人のために字を書
くことを好まなかった。

尋常の手段で入手することができなかつた大人
たちは、子ども好きの良寛に目をつけて、しばし
ば子ども達に手毬やおはじき用の貝殻を持たせて
贈つたりして、揮毫させたという。

「天上大風」も良寛が越後五合庵時代に花鉢に出
た時、一童児が半紙を差出し、「風を作つて飛ばし
たい」と云つて、良寛に書かせたものといわれて
いる。現存する墨書には風に作つて飛ばした飛
跡は全くないという。

「補稿」晩年の良寛さん

玉まりをつき、はじきをなし、
若菜をつみ、里の子どもと共に群
れて遊ぶ姿はよく知られている。
その反面では、酒を飲み、煙草
をすい、そしてかけごとも好む姿
もあつた。

……常に酒を好む。然りといえども量を超して酔
狂に至るを見ず。また相手は田夫野翁なりとも
互に銭を出し合ひて酒を買ひ呑むことを好む。



良寛の晩年 雲画

しかも汝一盃、吾一盃と云ふ風に盃の教彼我多少
なからしむる常とす……また煙草をも好む。
はじめは煙草入などを自ら持ちし事なく、他人の
ものを用ひて吸ふを常とせしが、後自ら持つこと
あり……
(良寛禪師奇談 良寛の庇護者
解良栄重(けらまじけ) 著)

良寛の最晩年、年七十にして若き女性貞心尼(二
乳子)と出会う。良寛没年までの五年間交友を温め
教多くの贈答歌が残されている。

……ほどへてみどうそこ給わりけるなかに「きみ
やあするみちやくるこのごろは
待てど暮せどおとすれのなき(良寛)
……御かへし奉るとて「ことしげき
むぐらのいほにとぢられてみさばこ
ころにまかせぶりけり(貞心尼)
……いざさらばかへらむというに「
りやうせん(叙述のみまえにちぎり
てしことなわすれよはへだつとも
(良寛)……御かえし「りやうせむ
のしやかのみまへたちぎりてしこと
はわすれよはへだつとも(貞心尼)

いくつになつても男と女の情愛が俗にして別を
こえず違わぬところに聖なる由縁が存在するので
あろう。

〔式〕 高瀬通跡と樋（はせ）の木

高瀬通跡

写真は阿賀崎公園（下図の点）から高瀬通跡の水
路を南方に見たもの。写真右手の生垣付近が玉島
武道館の裏庭、水路をはずさんで左側が旧土手道、
水路は武道館裏で行き止まりとなり、左折して土
手道の下を暗渠となって溜川へ流れる。



98.9.21



江戸時代
には水路は旧
土手道に沿っ
てまっすぐ南へと延び
て羽黒山の麓まで通じ
ていたが、大正時代に土手を削
り、その土砂で埋立てられて、
道路の拡張や住宅地と化した。黒崎交通
の前あたりから道が下って低くなっているの
はそのためである。

また、北へ延びる水路は新倉敷駅の西方、
瓜崎西で東へ折れて長尾小學校前からさらに
船穂まで続く。地元で高瀬通というときは瓜
崎西から羽黒山下までの水路を指したようだ。

ゆはぜ(櫨)の木

写真は旧高瀬通の西側土手に残るゆはぜの木。今は僅に二本だけとなった。

(表紙の写真も参考)

昔は爪崎西から系崎(七島の東端)までの西側土手にたくさん植えられていたといふ。高瀬通の土手を築くには大量の土砂を必要とするが、新田地帯の玉島村では土採り場が無い。そこで玉島新田村の庄屋はひそかに下竹村庄屋とはかり、玉島新田の西に接する岡山領七島のうちの一島を譲り受けて玉島村の土採り場とする。かわりに高瀬通の水を爪崎西のところで富田地区へ分けて供給できるようにすると約束をとりかわした。

しかし岡山藩浅口郡代菅の耳に聞えて遂に島を譲ることが出来なくなった。

そのため松山藩と玉島村では、爪崎西から系崎までの岡山領との境になる高瀬通の西側土手や川底は一滴の水ももらさないようにと、石灰や赤土・砂利ににがりを混ぜたたたき工法でコンクリートのような堅さにつぎ聖めて頑丈に築いたという。そしてさらに西側土手にはぜの木を植えて水ぬ



すびとを防いだという。うるし科の樹で皮膚の弱い人はかぶれやすい。また樹液のよい夏には汗をかいたからだに樹液がつくと全身にかぶれが広がって炎症に苦しむこともある。

一説には実から蠟を採ったともいう。

最近ではこの頑丈に作られた土手が宅地に利用されて家が建ち並びはじめた。

旧高瀬通経路図 (H元・7・21 渡辺作図)

[H10・6・1 一部修正]



今も古老の目に焼き付いている大正時代の風景は、高瀬通の土手道をやせた馬が乗合馬車を曳いて港町から玉島駅へ向ってガタゴトとのおんびり走り、高瀬通には高瀬舟の舳先に年をいた船頭が長い棹で舟を操り、土手の上を若い小船頭が長い引き綱の端を肩にして、舟を曳いて上るのどかな風景があった。夏には螢が舞い、精進流しの行灯が夕闇の中を流れる風物詩に充ちていた。

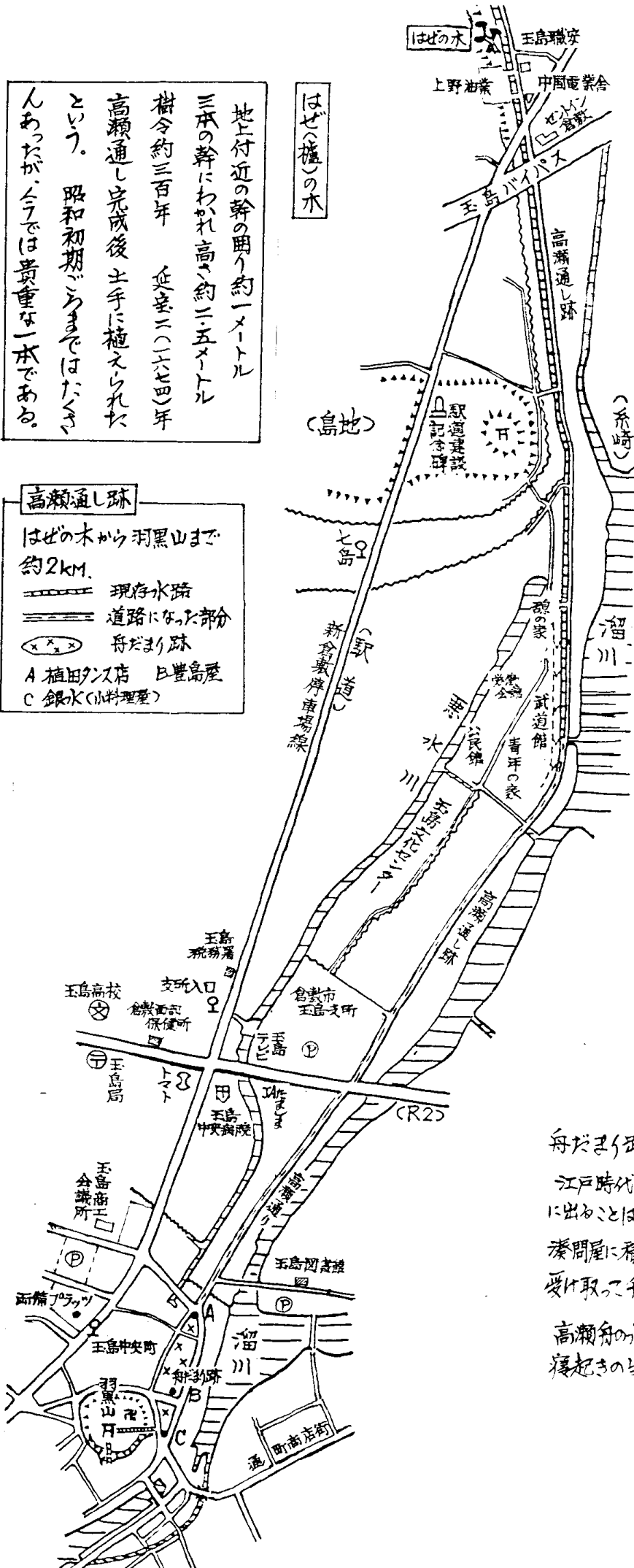
〔資料〕高瀬通今昔

現浅口郡船穂町の「一の口水門」から玉島羽黒山下の「舟だまり」(現在は消滅)まで延長約九キロメートルの農業用水路(幅五メートル)……米作りには支障のない冬期(秋彼岸から春彼岸まで)六ヶ月間に限って、底が平らで浅い高瀬舟(五十石積み)幅約二メートル・全長約十五メートル)の運行を許した。

江戸時代には松山藩の厳しい統制のもとで、高瀬・玉島間を運行した高瀬舟の総数は船株制により百四十一隻と定められていた。

明治以降「継ぎ舟制」等の規制が解かれ、最盛期には高瀬川全体で三百五十隻もの高瀬舟が備中北部山間地の物資輸送に活躍した。

昭和の初め、伯備線全線開通にともなうて、鉄道に物資輸送の座をうばわれ、高瀬舟は次第に姿を消していった。



地上付近の幹の囲い約一メートル
 三本の幹にわかれ高さ約二五メートル
 樹令約三百年 直径二〇二七四(年)
 高瀬通し完成後土手に植えられた
 という。昭和初期ごろまではたけ
 んあつたが、今では貴重な一本である。

はげ(樺)の木

高瀬通し跡
 はげの木から羽黒山まで
 約2km.
 〰〰〰 現存水路
 〰〰〰 道路になった部分
 (x x x) 舟だまり跡
 A 植田クソ店 B 豊島屋
 C 銀水(小料理屋)

高瀬通し跡の概況

1) かつては幅5~7mあったという水路も、現在では全線にわたってコンクリートで護岸整備され、幅も2mほどと狭くなった。一部では暗渠化して姿を消したところもある

2) 土手は拡幅整備され、道路として整備舗装され、また住宅地として新しい家が建ち並ぶなど姿が一変した。

3) 武道館裏付近で水路は途切れ、道路下をくぐって溜川へ流出する。
 武道館から南へ羽黒山までの約1kmは昭和初期になって水路及び舟だまりが埋立てられ、水路は道路に、舟だまりは住宅や商店地となった。

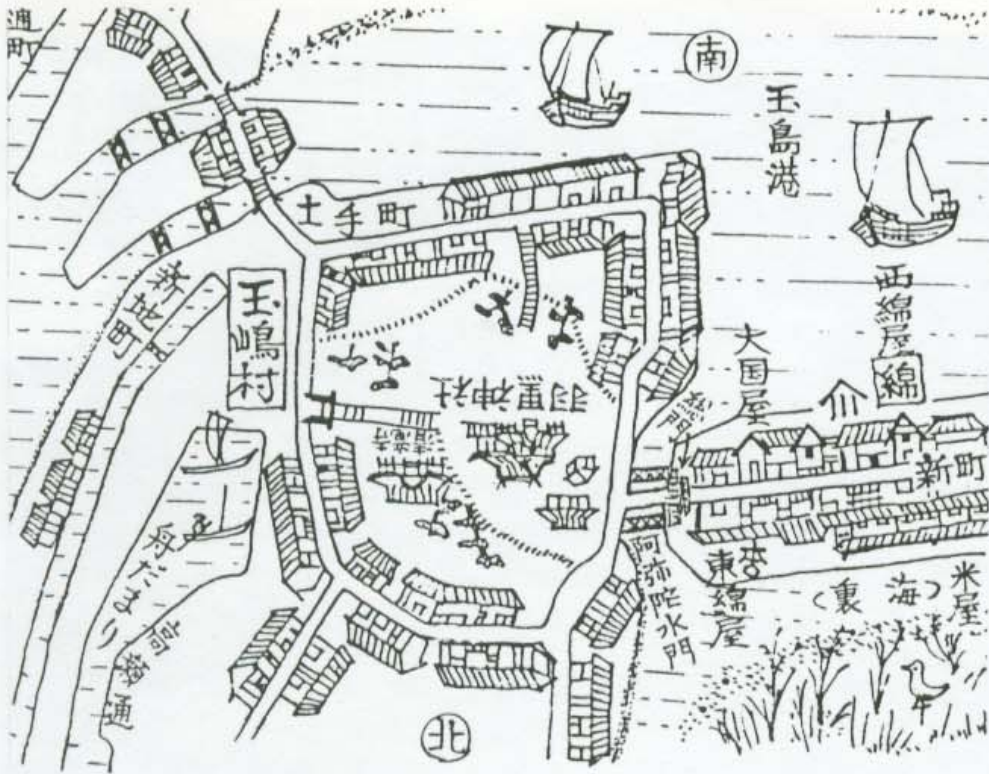
舟だまり跡

江戸時代には高梁から下ってきた高瀬舟は港に出ることは許されず、この舟だまりに舟を留めて漆問屋に積荷を引渡し、帰り荷もまた問屋から受け取って舟に積みこんで高梁へ帰っていった。

高瀬舟の水夫たちは舟を宿として炊事をし、寝起きの生活を1~2日したと云う。

【参】 舟だまり跡

舟だまりは前ページ地図のA点からC点までの範囲を占めていたのではないかと想像され、長さ七ロメトル前後、幅は広いところで二ロメトルぐらいと考えられる。



江戸時代終りごろに描かれたと思われる絵図のなかにも舟だまりが見えるが、具体的な形や大きさについての資料に乏しい。

写真の説明板は前ページ地図のB点―豊島屋のフロック塚に沿って、道路に面して立てられている。

道路をへだてた駐車場の空間はかつての舟だまりの面影をわずかにしのげる。港とつながる路下の暗渠も銀水付近にあった水門も今は跡形もない。



高瀬通しの終点玉島舟だまり跡

松山藩主水谷侯が玉島・阿賀崎新田を開拓した
 万治・寛文・延宝にかけての約三百三十年前、
 高梁川の水を入れた灌漑・水運両用の高瀬通し
 が船穂町水江の堅盤谷から系崎・七島を経て玉
 島舟だまりまで九一料、巾三七・八五米で開通
 された。一ノ口水門から二ノ口水門へ水を入れ
 た開門式運河でパナマ運河に先んずること二百
 四十年前であった。高瀬舟は下りは水棹を用
 ひ、上りは曳子が引いて通過した。下り舟には
 米 大豆 茶 薪炭 煙草 漆 和紙 鉄 綿
 べんがらなど、上り舟は北海道鮫粕 干鰯 昆
 布 塩 種粕 雑貨など積まれた。港の北前
 船と並んで江戸期の玉島繁栄の基となった。
 荷を積み下ろす舟だまりは羽黒山東側のこのあ
 たり約十町の水域であった。羽黒山北側に延び
 る水路は新町裏側に通じ、阿弥陀水門から舟は
 港に出た。明治になってからは港町に地下ト
 ンネルが出来、舟はそこから港に出た。昭和
 になつて高瀬通しはその機能を失い道路となり
 家並みが建ち現代に至つた。

平成六年十一月六日

玉島文化協会

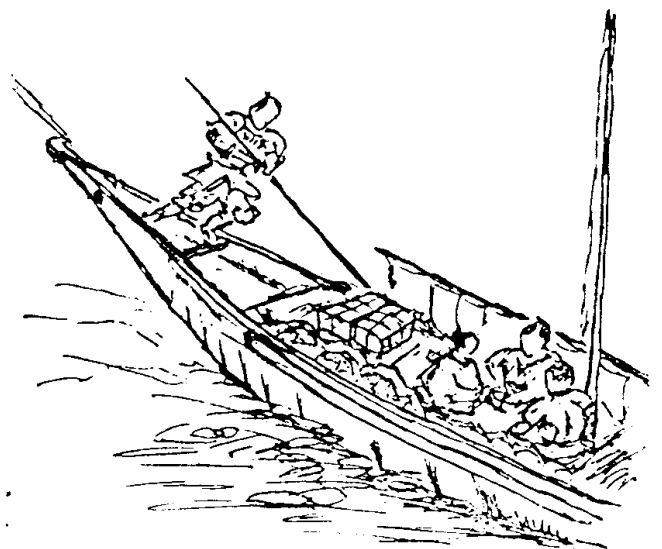
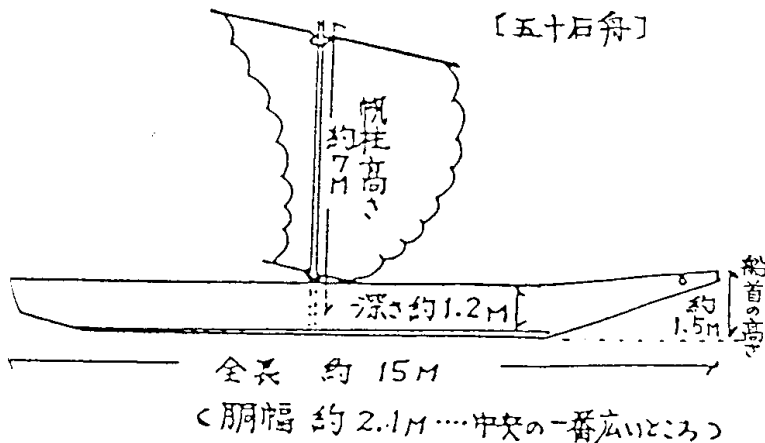
玉島観光ガイド協会



曳子の図

親方と呼ばれた船頭と
 曳子と称された小船頭
 二人の計三人一組が
 江戸時代では原則であ
 るという。
 毎月六回 三と八の日に
 定期便の運航
 松山・玉島間
 約四マキロ
 往復に約七日
 前後を要した

高瀬舟の図



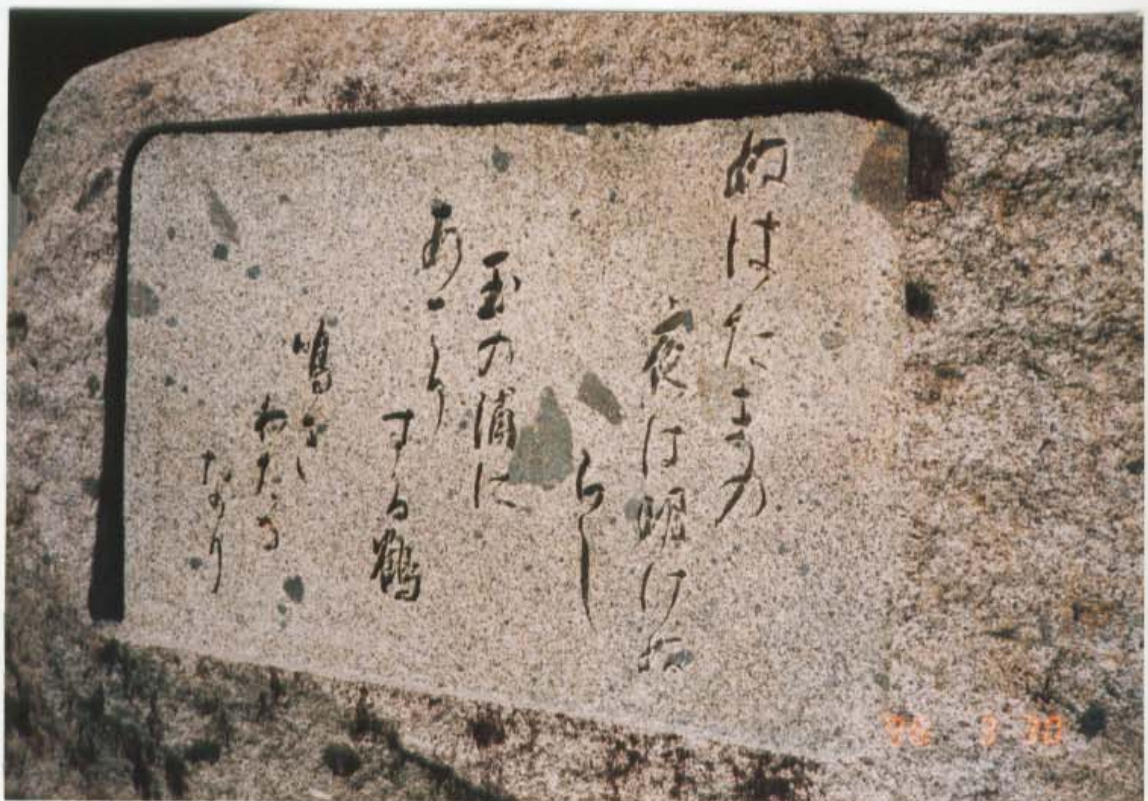
四 万葉の歌碑



写真上は玉島公民館の玄関正面下に設置された万葉の歌碑全景
 左の立看板は玉の浦萬葉集歌碑由来記 中央が万葉の歌碑
 全景は古代の玉の浦をイメージして設計・構成された。

写真下は歌碑に刻まれた歌の拡大、左側に歌を明記

ぬばたまの夜は明けぬらし玉の浦に
 あさりする鶴鳴さわわたるなり 万葉集卷十五



遺新羅使の人々が出帆の時に當つては別れを惜しみ、海上にあつては艱難辛苦になげき悲しんでは故郷を懐い、そして時には船上で宴を設けて古歌を吟誦して心をなぐさめて詠んだ歌百四十五首が万葉集卷十五の前半に収められている。

歌碑の歌を含めて短歌三首長歌一首の計四首の歌は玉の浦に碇泊した折に詠まれたものと考えられている。ここに残る三首を記述し以つて賞詠の資とする。

物に属けて思ひを発す歌

一首并せて短歌

朝されば 妹が手にまく 鏡
なす 三津の浜に 大舟に
ま握しじ貫き 韓国に 渡り
行かむと 直向かふ 敏馬を
さして 潮待ちて 水脈引さ
行けば 沖辺には 白波高み

万葉の歌碑 由来記

玉の浦萬葉集歌碑由来記

往古の玉島を詠んだ萬葉集のこの歌は天平八年(七三六)聖武帝の御代遺新羅使の一行が海路淡口の沖を通過した際、一行の一人がこのあたりの晩に鶴のあこり鳴く光景とらえたものである。

玉の浦が玉島の未だ浅海に浮ぶ島を指すことには萬葉集の定説である。玉の浦が陸地玉島になったのは備中松山藩主水谷侯父子の开拓事業によるもので、万治二年(一六五九)完成の玉島新田、寛文十年(一六七〇)完成の阿賀崎がそれである。この両新田の間に灌漑と舟運のため運河高瀬通しは、港口までつくられたがこの歌碑がまさにこの運河のあと近く新田のただ中に建設されたことは意義深い。遠い歴史の想いと美しい未来への夢に満ちたこの歌の倉古にして純一なる調へをこめて愛誦したいものである。

倉敷市

浦廻より 漕ぎて渡れば 我
妹に 淡路の島は 夕され
ば 雲居隠りぬ さ夜ふけて
行くへる知らに 我が心 明
石の浦に 舟泊めて 浮き寝
をしつつ わたつみの 沖辺
を見れば いざりする 海人
の娘は 舟乗り つらら
に浮けり 暁の 潮満ち来れ
ば 葦辺には 鶴鳴き渡る
朝なぎに 舟出させむと 舟
人も 水手も声呼び には鳥
の なづさひ行けば 家島は
雲居に見えぬ 我が思へる
心和ぐやと はやく来て 見
むと思ひて 大舟を 漕ぎ我
が行けば 沖つ液 高く立ち
来ぬ よそのみに 見つつ過
ぎ行き 玉の浦に 舟を留め
て 浜辺より 浦磯を見つつ
泣く子なす 音のみし泣かゆ
海神の 手巻の玉を 袋づと
に 妹に遺らむと 拾ひ取り
袖には入れて 返し遺る 杖
ひなれば 持てれども 験

をなみと また置きつるかも

反歌二首

玉の浦の奥つ白玉拾へれど
またぞ置きつる見る人をなみ

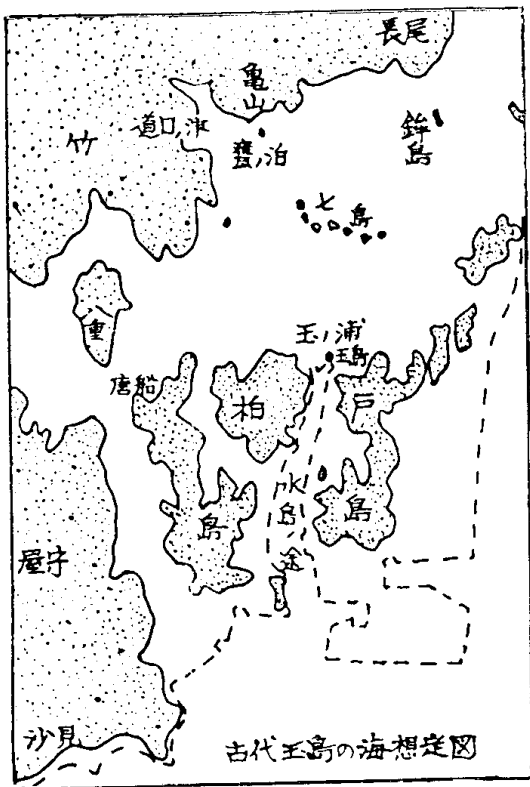
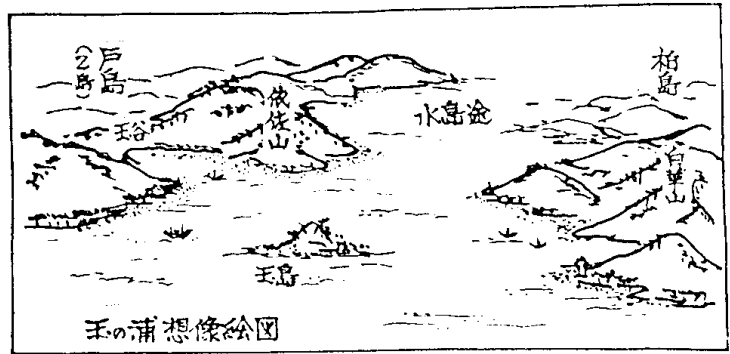
秋さらば我が舟泊てむ忘れ貝
寄せ来て置けれ沖つ白波

敢て註釈を加えず、人それぞれ
に誦みあじわい、万葉の歌人の心情
に深く思いをめぐらせることをおまむ

〔資料〕 歌碑の歌の北背景

天平八年(七三六)旧暦夏四月遣新羅使の一行百余
人は難波の三津浜から出帆する予定であったが、
船の準備が大幅に遅れて六月初めに出帆した。本
州の陸地沿いに瀬戸内海を西へと泊りを重ねなが
ら航行して、玉の浦へは六月半ば頃に碇泊したと
考えられる。

潮待ち・給水の港玉の浦は瀬戸内海東西航路の
ほぼ中央部、船は都から一段と遠ざかる。そして
周防灘では波浪にもてあそばれて漂流しながらも、
やっと北九州にたどり着く。



博多の筑紫館で七夕の宴を開きしはし日本との
別れを惜んだ一行だが、志岐の島では使節の一人
雪連宅満が伝染病で死去するという凶事が発生。
さらに対馬では順風を待って五日以上も碇泊を余
儀なくされ、前途の多難に不安はつのる。
かくして対馬を後にしたのは秋も終りの九月初
めであった。また万葉の歌も対馬での詠歌を最後
にぶつくりと途切れている。
秋には帰国する……玉の浦に再び碇泊して白い
玉を拾い最愛の妻への土産に持ち帰る……夢は
はかなく消え去った。
遣新羅使一行は苦難の末、翌九年正月第一陣十
名が奈良の都に帰り着いた。大使阿部継麻呂は帰
国途上対馬で病死。副使大伴三中也また病のため
帰京が遅れ、三月になってやっと第二陣として約
三十名が都に帰り着いた。

再び都の
地に足す
ることが
出来たの
は僅かに
四十人足
らずであ
ったとい
う。



伍 水谷勝隆の胸像

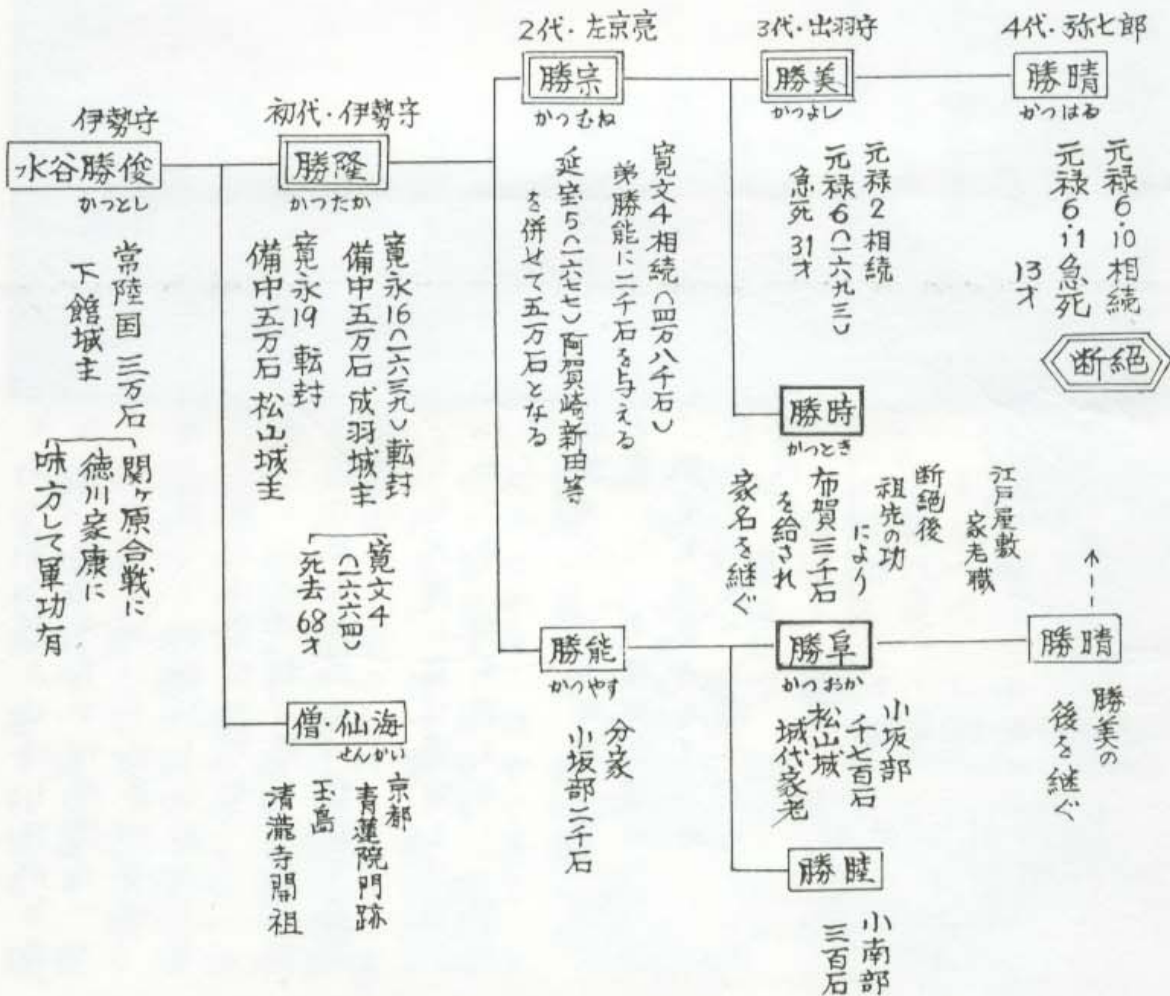
建立由来碑文

水谷侯について

備中松山城主水谷勝隆侯は三百余年前 内海の島々を結ぶ干拓を行い 中心に羽黒神社を祀り 高梁川に運河高瀬通しを開通した侯の卓越した構想は二代 三代と引継がれて 備中松山の玄関玉島港が誕生したのである 以来二百余年にわたり 千石船の出入りする 内海屈指の港として繁栄した 勝隆侯は勝れた武將として さらにその仁政は名君として 敬慕された ここに侯の遺徳を偲び 郷土玉島の発展を願ってこの像を建立した

昭和六十一年十一月吉日

玉島ライオンズクラブ



水谷侯三代玉島開港略記

初代伊勢守勝隆

① 寛永16年乙島村矢出に船
着場築造(玉島港の
はじめ)

② 寛永19年勇崎内新田開港

③ 正保2年船穂新田開港
(一の口水門と長崎白岸
用水路開設)

④ 明暦元年八崎と系崎④と
新丁鼻⑤に築堤
(新丁鼻に水門設置)

⑤ 万治元年阿弥陀山に羽黒
宮造営(玉島新田
開港成就祈願)

⑥ 万治2年福島と猿島北⑥
に築堤し玉島新
田開港・高瀬通
築造工事開始

二代左京亮勝宗

⑦ 寛文4年系崎と阿弥陀山
(六六四) ⑧と阿弥陀山と

矢出に築堤し玉
島新田拡張(開港)
旧堤防⑧取りこ
わし・新町堤防
⑨築造開始

⑧ 寛文5年羽黒宮社殿改築

羽黒大権現勸請
(阿弥陀山を羽黒山と改称)
清龍寺建立

常盤町土手町(中島)
町通町(回平町など)
港町づくり進展

⑨ 寛文6年勇崎外新田・黒
崎内浜新田開港

⑩ 寛文11年新町堤防完成
(二六七) 不用になった系
崎と阿弥陀山堤
防⑩を加下げ堤
防の中央に高瀬
通を作る

⑪ 寛文12年阿賀崎新田開港

玉島文化センター玄関前に設置された
水谷勝隆像(右)と建立由来碑(左)



① 寛文12年 爪崎く系崎堤防
の内側に高瀬通
を作る

三代出羽守勝美

④ 元禄5年 羽黒大権現に六
角石燈籠寄進
(一六九二)

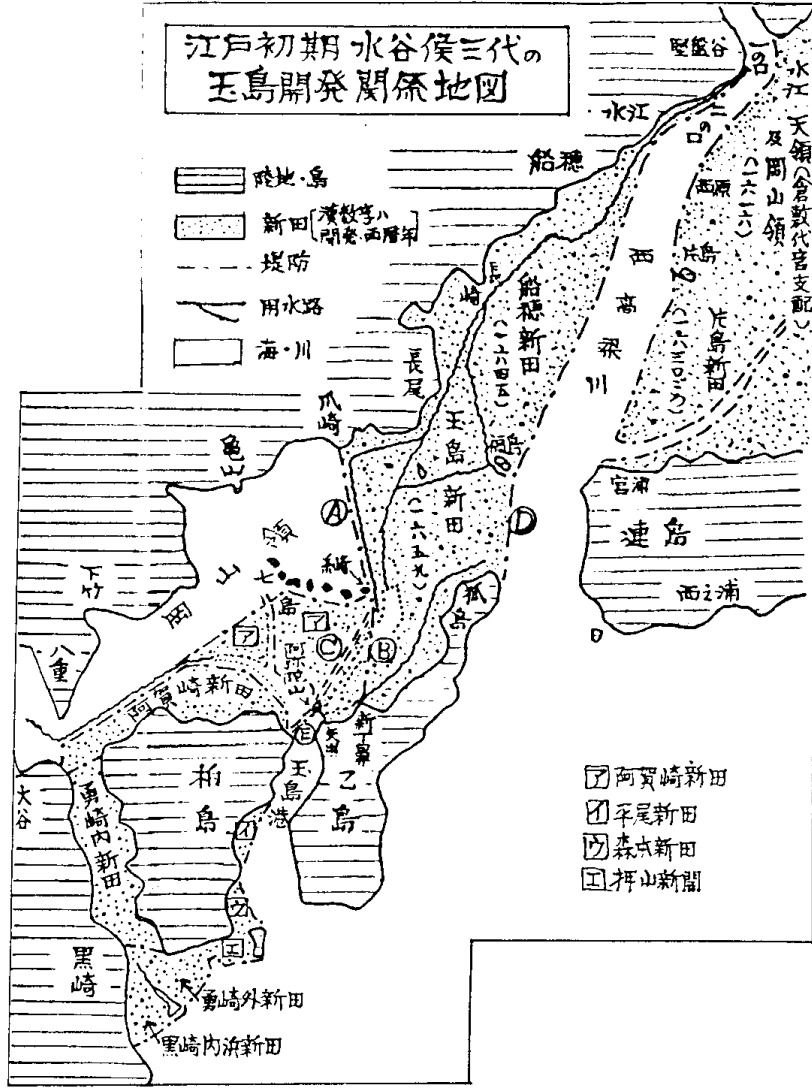
清瀧寺本堂建立

② 延宝2年 高瀬通完成
(一六七五)

③ 延宝4年 新町土手に港問
屋・蔵屋敷の町
づくり開始
(元禄年間中に完成)

元禄六年 勝美急逝

水谷家断絶



〔付〕 水谷侯遺徳顕彰之碑

建立由來碑文

今ヲ去ル三百年ノ昔備中松山ノ城主水谷伊勢守勝隆侯ガ瀬戸ノ海ニ點在シテイタ乙島ト柏島トヲ結ンデー大干拓事業ヲ計画玉島港ノ築港ニ着手シ長イ年月ト多額ノ経費ヲ投シテ漸ク其子勝宗ノ代ニナツテ此大事業ハ見事完成シタノデアリマス ソレカラ年変リ屋移テ現在ニ見ルヨウナ西ハ鴨方金光カラ東ハ船穂ニ至ル数百町歩ノ干拓地ハ黄金稔ル沃野ト化シ出船ニ入船ニ隆々ト躍進シツツアル今日ノ港玉島ヲ生シタノデアリマス 此ノ故人ノ偉業ノ雄大サニ驚嘆スルトトモニ其恩徳ヲ永遠ニ傳エルタメ此度ノ市制実施ヲ記念シ偉業ヲ俾テ當時ノ極門石ヲ以ツテ水谷侯遺徳顯彰ノ碑ヲ茲ニ建立シタ次第デアリマス

昭和二十七年五月十五日

水谷侯遺徳顯彰会

顕彰碑は玉島歴史民俗海洋資料館の西側道路をはさんだ反対側の里見川沿いにある。(次ページ下段写真)

水谷三代家断絶の謎

三代勝美は病篤く三十そこそこで嗣子が
ない。心配した周囲は他家を継いでいた勝
美の弟を元に戻して勝美の養子にするとい
う案を立て、勝美もこれを承知した。

しかし真つ向から反対したのが同族で長
老格の家老太郎左衛門が、同族で病弱な或
る少年を推し、江戸表にまで手を廻して後
継者権立の運動を展開した。

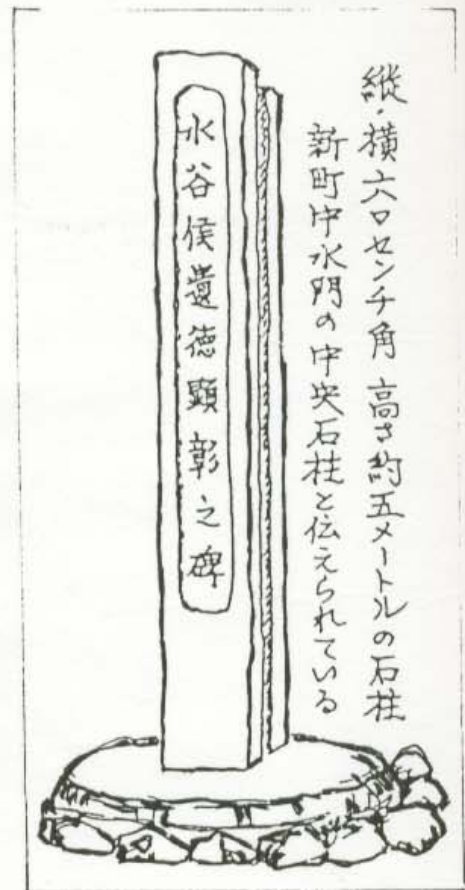
ところが成就寸前に勝美が歿し、さらに
肝心の少年も病死……幕府からは失態をな
じられ、家中は動転、為すすべもなく走法
通り御取潰しの運命となった。と池波正太
郎作『刊小説』「おれの足音」に謎解きが書
かれていたが、とにかく藩主の座をめぐる
後継者争いのお家騒動が、おいた悲運の結
末であったということであろう。

〔付記〕

二代左京亮勝宗の顕彰詩碑が羽黒神社
にある。ここでは割愛し、羽黒神社の
ところで取上げる



里見川べり・昭和水門裏手にある
水谷侯顕彰碑(写真中央)と建
立由来碑(写真右) 下図は顕彰碑
の模写と概要





写真上

倉敷市役所玉島支所内
水道局玉島営所局舎の
玄関脇に設置された
水道紀功碑（右）と
碑文解説板（左）
詳しくは次ページ参照

付

写真下

玉島看護高等専修学校の
玄関前の碑文
「萬不如自然」
碑の形と碑文の意味深長な
るを以って味わうべし



六 水道紀功碑

碑文

水道紀功碑

正三位勲一等大養毅題額

我玉島町二百餘年前填海開市地質鹹鹵
 難得清水居民久為患焉明治四十五年廣
 瀨正雄君為町長苦心經營鑿井於高梁川
 畔上成愛設貯水池於吉浦狐島二所通管
 引水以給人象大正四年開工翌年六月竣
 工需費六萬八千六百餘圓於是清水豐饒
 居民始免於患矣因立碑以永紀君功德

柚木方塔譯 奥邨直康書

書 大正十三年十月 建立
 町長 中塚一郎 建碑委員
 大野友松 龜山源兵衛
 山本久二郎 三宅最平

碑文解説

わが玉島町は二百餘年ほど前に海を埋めて町
 をこしらえたところである。だから地質は塩浜

であるので、なかなか清水が得られないため、
 住んでいる人々は長い間困っていた。
 ところが明治四十五年広瀬正雄君が町長にな
 った。いろいろと苦心の末に、高梁川のほとり
 の上成に井戸を掘り、さらに貯水池を吉浦・狐
 島の二ヶ所に設け、ここから鉄管で町まで水を
 引き、人家に給水する計画を立て、大正四年に
 着工し翌五年六月に竣工することができた。こ
 の工事費は六万八千六百円余りであった。
 こうして清水が豊かに得られたので、住民は
 やっと水の悩みが解消したわけである。こうい
 うわけで、碑を立てて永く広瀬君の功德を忘れ
 ないようにする次第である。

大正十三年十月建立の記念碑は、現在倉敷
 市水道局玉島営業所局舎の玄関横に移転復
 原されている。

大正年間における玉島町の年平均町費決算額は
 約十三万五千円であった(浅白郡誌)……工事費六万
 八千六百円は現在の三十億円に相当か……

玉島の上水道

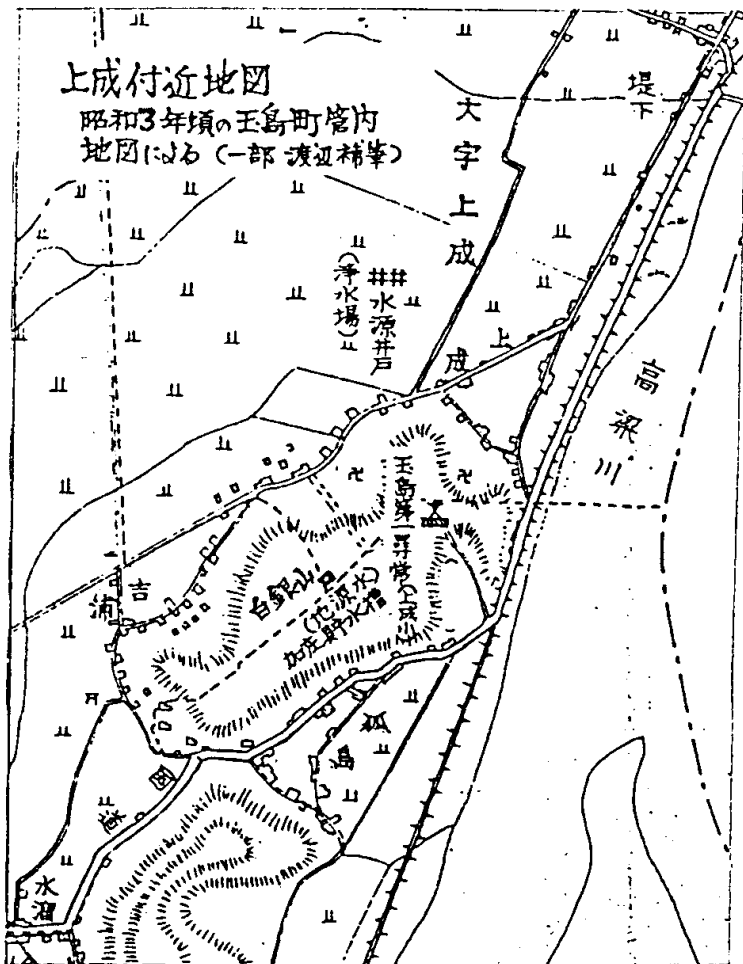
大正四(一九一五)年の春に着
工し翌五年夏に竣工——上

成の田んぼ中に水源用の井戸を掘り、高梁川の
伏流水を汲み上げて浄水し、白銀山山頂の貯水
槽へポンプで上げる。これより市街地へ導水
管を引き、給水するという方法であった。

設置当時の状況は、水道管の総延長約四キロ
メートル余、一日の給水量約六百十キロリット
ル(約六一口トン)……最大給水量約千百キロ
リットル、最少給水量約二百三十キロリットル
であった。

自家用水道栓三百八十箇、共同用水道栓五百
三十箇、消火用栓六十四箇、年間使用料総額が
一万四千五百円余(大正九年調)であったという。

上水道ができるまでは特に海の中に築かれた
新町・土手町・中島町・新樋や上町などは、
井戸を掘っても塩分の強い水しか得られず、飲
料用の真水の入手や確保には永い間にわたって
苦勞したと考えられる。



数年前、新町で江戸時代以降のものと思
われる石造りの樋の一部を土中から発見したと
聞いた。樋の継ぎ目や要所は「しっくい」で
しつかり堅められていることから、上水道設備
ではないかと想像されたが、今のところ詳しい
ことはわかっていない。